

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530906

研究課題名(和文) 高機能広汎性発達障害者の対人関係能力の向上を目指した臨床心理学的支援に関する研究

研究課題名(英文) The clinical study on supporting to improve of sociability to people with high-functioning pervasive developmental disorders.

研究代表者

高原 朗子 (Takahara, Akiko)

熊本大学・教育学部・教授

研究者番号：20264989

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：心理劇とはモレノによって開発された集団心理療法であり、即興の形式を用いて人間および人間を取り巻く状況を探求する科学である。本研究では高機能広汎性発達障害児・者に心理劇による支援を行い、その効果を検証した。その際、「対人関係の多重構造モデル」(高原2011)の視点(心理劇の場で起こる「現実の人間関係」と「心理的現実の人間関係」の同時的体験)に焦点をあて、対象者への心理劇の効果を分析した。積み重ねられた事例データの整理の結果、「現実の人間関係」が安定しているほど、心理劇の場で、より適切に気持ちの表現がみられるなどの傾向が認められた。

研究成果の概要(英文)：Psychodrama is a group psychotherapy developed by Moreno. It is science to search people and the situation of them with an extempore play. The aim of this study was to examine the effects of psychodrama among people with high-functioning pervasive developmental disorders(HFPDD). This analysis on psychodrama focused on "the model of multistoried structure on interpersonal relationship"(Takahara, 2011), which is defined simultaneous experience of "real interpersonal relationship" and "psychic real interpersonal relationship" occurred in the dramatization. Results of Cases data showed that the steadiness of "real interpersonal relationship" was related to express their own thoughts properly.

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：高機能広汎性発達障害 心理劇 臨床心理学 対人関係

## 1. 研究開始当初の背景

高機能広汎性発達障害(高機能自閉症やアスペルガー症候群)を取り巻く社会的状況は特別支援教育や発達障害者支援法成立などにより、その支援の在り方についても、今までの教育や支援方法のみではない新たな方法が模索されてきた。

彼等を支援するには、従来の行動療法や言語訓練などに加えて、社会適応力の向上、自分の感情を適切に表出できることなど、人格を向上させるためのさらなる工夫が必要であった。

研究代表者は、先行研究で約20年間、集団心理療法の一技法である心理劇を高機能広汎性発達障害児/者に適用し、その実践の実際と理論的枠組み、効用と限界などの知見を提示することで、上記の問題軽減のための一方法を提案してきた。

具体的には、2003年に博士論文(九州大学:「自閉性障害者の情動・認知の生涯発達援助に関する心理学的研究-心理劇的方法の臨床適用を中心として-」)にて、広汎性発達障害者(主に思春期以降の青少年)に対する心的劇による支援の効果についてまとめた。心理劇的方法を2年以上施行された対象者34名について、援助の視点を次の7点(状態評価 対人相互反応の向上 言語表出の促進 問題行動の抑制 社会性の育成 情動表出の変化 心理療法)に分け評価し、知的障害の程度および症状の違いによって効果的かどうかを提示した。その後、科学研究費を得て、それぞれの症状によって、効果が変わり、援助もそれに基づいて工夫し、変えていくことの意義が見出された。以上の知見は国内外の学会(国際児童青年精神医学会・日本心理臨床学会・日本心理劇学会・日本自閉症協会・日本自閉症スペクトラム学会・西日本心理劇学会)等で発表し、実践ワークショップも行ってきた。その結果、本研究テーマは徐々に臨床的研究が進み、代表者の研究の他にも様々な研究知見がもたらされてきた(田中 2010 他)。さらに、高原(2011 印刷中)で、今までの知見に加えて、心理劇の持つ対人関係の多重構造モデル(二重構造モデル)に着目することで、この技法を利用する上での新たな発展の可能性がもたらされた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高機能広汎性発達障害のある子どもや成人の対人関係能力向上に向けて、集団心理療法の一技法である心理劇を利用した支援法を臨床心理学的に実践・検証し確立していくことである。特に心理劇の技法が持つ「対人関係の多重構造モデル」という視点で、彼らの社会性や対人関係能力の向上を目指すために、心理劇による支援法をマニュアル化し、様々な臨床の場面で利用できるようにシステム構築していくことである。

(1) 研究の対象者は、幼児・小学校や中学校(特別支援学校を含む)に在籍している児童・生徒、高校から大学までの思春期以降の青少年・さらに成人である。彼らに対して様々な臨床場面で心理劇を施行してきた。そこで各発達段階・臨床場面・各個人の状況によって心理劇の狙いを変えていくことが重要であることが今までの研究で認められた。これは「発達障害のための心理劇」(高原2007)および「軽度発達障害のための心理劇」(高原 2009)他に詳しい。

(2) 本研究では、各発達段階の対象者に行う心理劇を、対人関係の多重構造モデルという視点で検討し、発達段階や症状によるその効果や技法の確立を考えていく。特に本人の生涯のどの時点で施行されたかによっても、心理劇の効果は異なってくると思われる。本研究では、研究期間での変化を児童から成人まで追うことで高機能広汎性発達障害児・者に対する一生涯の発達支援を目的とした心的援助の方策についてさらに具体的で新たな知見を提案したい。以上が、本研究の目的である。

(3) 心理劇における「対人関係の多重構造」モデル(高原 2010、2011)という概念を基に分析する(図1)。

心理劇の場では他者との関係において二重構造を代表とする多重構造となっている。例えば古川(2010)は、障害のある高齢者へのロール・プレイングを利用した面接場面ではクライアント-セラピスト関係と、ロール・プレイング上の役割関係の両方が同時に経験されていると述べている。そのように心理劇を実施された集団では現実の人間関係と心理劇の中での心理的現実の人間関係を同時に体験する。そのような状況はその人の自己理解・他者理解に影響を与えると思われるが、自己理解・他者理解という認知的作業が難しいといわれる発達障害児・者においてはどうかを検討したい。今までの知見から考えられる仮説では、心理劇の場を操作的に提供することで、彼らの自己理解・他者理解を促進すると思われる。

また、対人関係の二重構造だけではなく、場合によるとこの他にもクライアント-セラピスト関係や家族で参加する場合には家族という関係など、様々な関係が交錯しながらそこでの体験は自己理解・他者理解を深めるものとなりえるのである。

また、この対人関係の二重構造には現実と心理的現実の相互関係がある。ある事例では、現実場面での今までに出来上がっていた信頼関係によって心理的現実場面で生の自分をさらけ出し、恥ずかしいと感じながらもその後の劇化で回復していただければ、強化し合う場合である。一方ある事例では、メンバーとまだ信頼関係はできていないが、心理的現実場面で自分の劇を皆が協力して作ってくれたことに対しての感謝が、現実場面での肯

定的見方にも変わることもある。  
さらに、現実場面で信頼関係が築かれているからこそ心理的現実場面では相手に対して否定的な感情を伝えることもできるし、弱い自分を出すこともできよう。このようにその場のメンバーの関係性を考えながら、支援者は劇の場面を演出していくことも重要であろう。

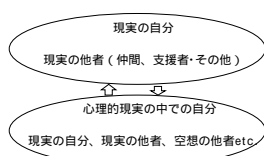


図1. 心理劇における「対人関係の多重構造」モデル

### 3. 研究の方法

本研究の基本的な流れは、(1)対象者へのインタビュー面接による心理アセスメント、(2)プログラム作成と実施、(3)プログラム実施後の成果についての実態把握と考察、その発表からなる。

(1)対象者へのインタビュー面接による心理アセスメント

インタビュー面接にて心理アセスメントおよび保護者へのインフォームド・コンセントを行った。なお、長期間心理劇を実施している成人の高機能広汎性発達障害者についてはWISC系の知能検査及び面接を行った。幼児期・児童期の対象児については臨床の場によっては面接のみ、もしくは聞き取りによる発達段階の確認を行った者もいる。

#### (2)プログラム作成と実施

ウォーミングアップ 演技へ向けて自発性を高めるために行う。討論や対話など言語を使うものや、体操・ゲームのように身体を使うものに分けられる。

劇化(ドラマ) 主にロール・プレイングを行いながら、参加者が自発的に演じ、場面を展開し、問題解決していく。

具体例としては、感情を適切に表現したり、他者を意識するようなドラマや、言葉のみでなく姿勢を伴ったイメージ表現を促進するようなドラマを行った。過去・現在・未来の自分を表現する劇や「今、行きたいところ」「今、やりたいこと」など、今の気持ちを表現する劇、さらに日常生活(家庭、学校、職場、施設)で困っていること、友達との人間関係などを劇化する。

シェアリング 演者の体験を参加者一同で分かち合う場面である。シェアリングでは、各参加者が気づきを述べ、新たに思いを感じ取る。また、役を引きずらないよう役割解除を行う。役割解除とは「あなたは今演じたではありません、いつもの さんに戻ってください」など言って、日常の自分に戻る

作業である。

毎回、ウォーミングアップ・劇化・シェアリングの流れで1時間~2時間程度行う予定である。

研究代表者は主に、監督(Director)や補助自我(Auxiliary Ego)として、研究に関わる。参加者(心理劇施行対象者)は、発達年齢毎に、1グループ 5~10人程度、高機能広汎性発達障害(高機能自閉症・アスペルガー症候群・注意欠陥/多動性障害・軽度知的障害など)と診断された人たちが主な対象者である。

年齢の幅は、5歳~40歳代までで、それぞれ年齢や障害レベル、または支援ニーズに合わせていくつかのグループに配属する。

対象児・者の年齢や症状によって、心理劇の各種タイプ・技法(古典的サイコドラマ・ソシオドラマ・SST・ロールプレイなど)を組み合わせていった。

また今回の研究では対人関係の多重構造モデルという視点を用いて、心理劇の中や現実場面で対象者が体験したことを明確に示し、その効果を測定していく。記録の整理として、毎回記録(文書、VTR)を残す。

本研究を行うための臨床の場としては、熊本大学教育学部附属教育実践総合センター

特別支援学校や特別支援教育の場、今まで関わってきた社会福祉法人(知的障害者入所更生施設・通所更生施設)、今まで関わってきた療育キャンプの会場等であった。

(3)プログラム実施後の成果についての実態把握と考察、その発表

結果については、国内の学会や研究会等で発表した。また、日本自閉症スペクトラム学会・日本心理劇学会・西日本心理劇学会・九州発達障害療育研究会等で心理劇の実技発表等を行った。

### 4. 研究成果

(1) 評価表の試案作成に向けて:「対人関係の多重構造モデル」評価表(試案)作成に向けて、今まで行ってきた心理劇のデータ分析を行った。その結果、「現実での対人関係」が良好である仲間の存在が主役の心理劇に大きな効果をもたらすことが推察された。

(2) 成果発表・情報収集:日本心理劇学会・日本自閉症スペクトラム障害・西日本心理劇学会等にて、研究の成果の一部を発表し(高原 2011, 2012, 2013 他) 編著を刊行し(高原 2012a, 2012b) 心理劇の実施方法やその効果を示した。更に各種研究会・研修会で実践発表や情報収集を行った。各発達段階にある児童から成人 15名に対して心理劇支援を行い、データを収集し、成果の一部をまとめた。また、研究補助者(学生・ボランティア等)の教育:支援マニュアル(高原 2007, 2009 他)に基づき専門家や学生たちを指導し、

補助自我として心理劇支援に参加させ、その成果は高原(2012a,2012b)にまとめた。その結果、本研究の主な成果は1. 児童期から青年期までの、今までの対象者に心理劇による支援を行い、そのデータを分析し、効果をまとめ、さらに2. 支援マニュアルの簡易化を図り、それを中間報告(高原 2012b)として示したことである。

(3) 熊本大学教育学部附属特別支援学校において同校が独自に設定している各教科等を合わせた指導「コミュニケーションの学習」の一技法として、本研究の成果を活用しており、知的障害児を含む発達障害児のコミュニケーション能力の向上に本研究が利用できる可能性が認められた(前田・高原他 2013)。

(4) 残された課題: 心理劇の評価表の作成を目指していたが、様々な理由で当初予定していたようには実践を行う機会が持てず、心理劇における「対人関係の多重構造モデル」評価表(試案)を作成することはできなかった。今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

① 高原朗子: 自閉症スペクトラム障害のための心理劇 九州発達障害療育研究会紀要 第1巻. 41 - 70 (2014), 査読無

高原朗子: 現代日本における発達障害児の支援 その理解と支援法としての心理劇 . 糟屋子ども発達センター研究紀要 第1巻1号 . 59 ~ 65 (2013), 査読無

高原朗子: 子どもの心の最新治療、発達障害児のためのサイコドラマ 育ちの科学 19巻 . 64 - 70 (2012), 査読無

高原朗子: "児童の特性に応じた生徒指導のあり方" 平成 23 年度熊本県小学校生徒指導 会誌 19号 . 5 - 8 (2012), 査読無

高原朗子: "心理劇の場における対人関係の二重構造 - 発達障害児・者の自己理解・他者理解の深まりを求めて" 心理劇研究 35巻 . 1 - 7 (2011), 査読有

高原朗子: "発達障害児への面接技法" 臨床心理学 11巻 . 188 - 193 (2011), 査読無

[学会発表](計 8 件)

① 高原朗子: 思春期以降、発達障害を抱える人たちへの理解と支援 - 彼らとの人間関係を構築するためのヒント . 「熊本こころの電話」開設 30 周年記念講演会(招待講演). (2014年2月23日).熊本県 熊本学園大学

高原朗子: 自閉症児における学習支援のポイント . 九州発達障害療育研究会第 14 回福岡大会(招待講演). (2014年2月16日). 福岡県 西日本短期大学

高原朗子: 自閉症スペクトラム障害児・者へのサイコドラマ . 日本自閉症スペクトラム学会九州支部第 4 回資格認定講座(招待講演). (2013年11月2日). 熊本県 熊本大学

前田忠彦・高原朗子・上中博美・藤田朋子・澤僚久・芳武敏雄・境仁基: 知的障がい校におけるコミュニケーション能力を育むための実践研究 新しい指導形態「コミュニケーションの学習」の設定 . 日本特殊教育学会第 51 回大会. (2013年8月31日). 東京都 明星大学

高原朗子: 自閉症児・者へのサイコドラマ 社会福祉法人嬉泉第 29 回自閉症実践療育セミナー(招待講演). (2013年2月2日). 東京都 プラザホール(霞が関ビル)

高原朗子: シンポジウム「科学としての心理劇を考える 発達障害者にどのような効果があるかという視点から」日本心理劇学会第 18 回大会(招待講演). (2012年12月16日). 東京都 駒澤大学

高原朗子・古川卓・松井達矢・村上広美: ワークショップ「初めての心理劇」"西日本心理劇学会第 37 回福岡大会(招待講演). (2012年2月18日). 福岡市 JR 博多シティ会議場

高原朗子: シンポジウム「心理劇の可能性を探る」心理劇と発達障害 日本心理劇学会第 17 回大会(招待講演). (2011年12月4日). 鳥取県 米子コンベンションセンター

[図書](計 2 件)

高原朗子: "発達障害児の生涯支援 - 社会への架け橋「心理劇」 - "九州大学出版会. 237 (2012)

高原朗子: "心理劇ってな~んだ? 子どもや発達障害児のための心理劇 . 平成 23 年度研究成果中間報告書" かもめ印刷 . 16 (2012)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:

番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者  
高原朗子 (TAKAHARA AKIKO)  
熊本大学・教育学部・教授  
研究者番号：20264989

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし